

Title	乳房の美容整形と乳癌
Author(s)	山崎, 武
Citation	癌と人. 1975, 3, p. 10-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24213
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

乳房の美容整形と乳癌

評議員 山 崎 武*

I はじめに

数年前に乳房の美容整形が新聞面をにぎわした事がある。ワセリンを注入した直後それが血管に流入し栓塞を起して死亡したり、注入後10年以上もたってから注入されたワセリンが全身に拡散し網内系に沈着して死亡したとか、乳房整形患者に乳癌が何例か見付かったとかである。これらが大学病院などではなく個人の医院で行なわれ、週刊誌等で広告されて来たため、プライバシーの問題とからんで社会的に大きな反響を呼んだ。美容整形が潜在的に流行するのはそれだけ需要が多いことを意味し、欧米と異なり、小乳房の多いわが国では美容医学の発展は社会の要請でもあろう。われわれは、11年前に乳房のX線検査を日常の診断に応用し始めて以来、現在までに2600名の乳房撮影を行ない、又外科においては7211名に及ぶ乳癌の集団検診が行なわれ、180例の乳癌と17例の美容整形乳房を記録した。そこで以下これらの経験をもとにわが国における乳房の美容整形について少し考えてみよう。

II 豊胸術とは

美しい顔かたちや豊かな乳房を持ちたいという女性心理は形成外科学なる外科の一専門分野を生み出すのに大きな影響力をもった。形成外科学の一領域である美容外科に属する豊胸術は果して危険なものか、又発癌の恐れがあるのか？もし安全なのであればこの美女製造術に反対する女性（男性はもちろん）はあるまい。豊胸術とは乳房内の乳腺実質の下のスペースに種々な材料を入れて、乳房を大きく美しく見せる方法を総称し、簡単な人工物質注入法と切開を行なう埋没法とに分けられる。傷跡が残らない

ので前者が普及しているらしい。注入物質としては古くはワセリン、パラフィン等、続いて昭和30年代にはオルガノーゲン（成分不明）、ピオブラックス（高級脂肪酸グリセリン混合物）等が流行し、最近ではシリコン系合成材料（Medical Fluid 360、各種硬度の架橋 DMPS、可変架橋性の Silastic、Phycon 等）が安全とされている。然し、アメリカではシリコンを豊胸術に用いることはFDAが禁止している。埋没法としては、自家脂肪組織移植、シリコン、ポリウレタン、イヴァロン等のスポンジやシリコンバッグの挿入等の方法がある。

III 豊胸術の診断

事プライバシーに関係し、しかも医学的な難かしい内容の事柄を問診で知る事は不確実である。埋没法の様に切開創が残るものは診察ですぐ分るが、注入法の場合は如何に熟練した乳腺外科専門医でも分り難い。従って日常の臨床診断法では豊胸術を受けたか否かは分らず問診によるか又はレントゲン検査で発見されるのが普通である。健康診断の際胸部のレントゲンを撮るとシリコンならば、肺癌の様なかげが写って来る。マンモグラフィーを行なえば乳房内部の微細な構造も描写される。ワセリンやパラフィン等とシリコンとはX線に対する透過度の相違で区別され、何が、どんな形で、どう分布しているかも良く分る。しかし少量のシリコン注入はレントゲンでも分らないことがある。各種のX線検査の普及はこのプライバシーまでも記録に残すため、逆にこっそり豊胸術を受けるという事態が未然に防止されているようである。

IV 豊胸術の普及度に関する推測

美容整形の盛んになった昭和30年頃から現在

* 大阪大学講師（微生物病研究所附属病院放射線科）

まで20年間に全国でどの位の数の豊胸術が行なわれているであろうか。表(1)は微研病院で記録された豊胸術の症例数を示す。乳癌180例に対し豊胸術は17例(後日の摘出例も含めて)で、乳癌の1%である。わが国では年間約1万人の乳癌が発生していると思われるから、この20年間に20万人の乳癌が発生し、2万人の豊胸術が行なわれたことになる。この中で北摂地区における7211名の集団検診では9例の豊胸術が記録され、これは800人に1人の割合である。従ってわが国の35才以上の女性人口を2500万人と見ると、豊胸術を受けた女性は全国では3万人居る事になり、この数値は上記の乳癌発生数から割り出した数字に近い。乳腺外来患者250人中に1人居る計算である。

V 豊胸術の安全性と発癌

全国で2~3万人という上述の数字から見ると豊胸術は広告の割には行なわれていない。これはその安全性に対する不信感や宗教心の影響、或は経済水準の向上や生活様式の欧米化による体型の変化などによるものであろう。表に示す様に乳癌180例中には豊胸術は1例もない。逆に豊胸術17例の経過観察中に乳癌を発生して来たものは1例もなく、又手術を要する様な特別な後遺症も起っていない。この様な結果から見ると、微研での経験に関する限り、豊胸術は安全であって、危険性がオーバーに考えられて来たかとも思える。世界的にも過去15年間に4万人以上が豊胸術を受けており、これが乳癌を増加させたという証拠はないとして、豊胸術を發

癌に結びつける見解に対する批判もある。然し外来診察で集団検診の3倍も多く見られた事は、何等かの症状をもつものが多いことを意味するものと考えられ、又症例数が少なく、観察期間も平均11年と短いことも結論を出すには早計である。最も問題なのはパラフィン、シリコンの注入で確認されている異物肉芽腫(Paraffinoma, Siliconoma)の発生である。この様なしこりは乳癌と紛らわしく、又X線写真の読影に際しても早期乳癌を発見する上で大きな障害となる。注入物質が不規則に分散し、石灰化を起したり、炎症を合併した様な場合は進行乳癌すらも見落される。従って豊胸術を受けた人は無症状でもBase lineとして乳房撮影を記録に残しておくべきであるという文献もある。筆者はX線被曝を考慮して40才を過ぎれば1~2年に1回位の割合で定期的乳房撮影が必要と考えており、医師会その他各方面の適切な指導が望まれる。何れにしてもこの様な局所的な造型美術は不自然であり、美容医学は個体全体を配慮した内科的な領域の様に思われる。

VI おわりに

“癌の撲滅”という現代医学最大の課題と“理想的な肉体美の造型”という人類の願いが、ともに叶えられる日が何時かはやって来よう。その夢の日まで、ダビンチの昔と同じく今もなお、“医師は科学者であると同時に芸術家たるべし”という先人の教訓を語り伝え、心して行かねばなるまい。

表(1)

	期間 (年)	患者数 (乳房撮影数)	(1) 乳癌	(2) 豊胸術	(1)+(2) 重複例
外来診察	11	約2000 (2000)	163	8	0
集団検診	6.5	7211 (578)	17	9	0
合計			180	17	0